

[名人が一つ一つの作業を丁寧にする理由を考える]

前回、作業を丁寧に行なうことの意味を書いたのだが、「丁寧な作業」という曖昧な表現ではどのような行なうのかさっぱりわからないと思う。そこで、もう少し踏み込んでみることにしよう。

作業の方法を教えるだけでは適切な作業はできない

さて、誰かに作業を教える時に、どのような点に留意して皆さんは教えているだろうか。例えば、ロータリー耕であれば、ギアを何速に入れた、PTOの回転数を〇〇に、ロータリーの作業深さは△△という感じで教えるのではないだろうか。これは作業の方法を教えているが、作業の意味については教えていない。

作業を教える上でもっとも重要なのは、作業方法を教えるのではなく、なぜ、その作業を行なうのかを教えることである。最大の理由は、やり方を教えただけでは、どのような作業が丁寧で良いのかわからないためである。簡単にいえば、どのような結果を求めて、その作業を行なうのかを明確に伝えなければ、良い結果が得られないのだ。

再びロータリー耕を例に挙げてみる。ロータリー耕は播種準備のための耕起作業である。適度な大きさに土塊を砕いて、次の工程である播種

作業が滞りなく行なわれるように整地すること、順調に発芽・出芽が揃うように種子に水が移行しやすいような状態にすることがその目的である。

しかし、多くの方がロータリーの作業を定型的に行っているようにみえる。というのも、どのような場合でも圃場の見た目をきれいにするために同じような作業をしているのである。低速でPTOの回転数を上げ、二度三度かけることは場合によっては必要なことだが、土塊が細かくなりすぎる弊害のほうが大きくなることの方が多し。燃料も必要となる上に、時間もかかってしまう。

極端な例を挙げると、土壌が水分の多い状態でロータリーをかけてしまふことにより、砕土ができずに土塊ができ、播種作業ができなくなるような場合がある。降雨が続いて思い通りの作業ができなかったり、土壌条件を知らない初めての畑であったり、条件の悪い状態でも安易にロータリー耕をすれば、その後の播種作業や発芽に悪影響を及ぼすことになる。

発芽に必要な条件を細かく考えてみる。水分が土壌から種子へ移行するには、土壌粒子が細かいほうが良い。ところが、細かすぎると土壌が締まりやすくなり、降雨の際には土

壌中の酸素が失われやすくなり、呼吸が妨げられ、発芽や出芽に障害が起る可能性がある。

それでは、ロータリー耕はどの程度行なえばよいのだろうか。答えは、細か過ぎず、粗過ぎずという適度な粒子になるのが丁度よいとなる。土質によって違うので、発芽や出芽が揃うように播種床をつくるのが「丁寧な作業」だとしか言いようがない。いわゆる名人と言われる人に話を聞くと、播種床をつくるこの作業に非常に気を遣っているのがわかる。そんな細かいことを考えていられるか、と思われるかもしれない。

岡本 信一 Shinichi Okamoto

1961年生まれ。日本大学文理学部心理学科卒業後、埼玉県、北海道の農家にて農業研修。派米農業研修生として2年間アメリカにて農業研修。種苗メーカー勤務後、1995年 農業コンサルタントとして独立。1998年(有)アグセス設立代表取締役。農業法人、農業関連メーカー、農産物流通企業、商社などの農業生産のコンサルタントを国内外で行っている。講習会、研究会、現地生産指導などは多数。無駄を省いたコスト削減を行ないつつ、効率の良い農業生産を目指している。

Blog : 「あなたも農業コンサルタントになれる」

<http://ameblo.jp/nougyoukonnsaru/>

PROFILE

ちろん大規模化しつつある現在の状況では、本当の意味で細かい作業は不可能に近いし、土壤条件を把握するのも、条件に合わせて作業を変えるのも難しいかもしれない。だが、播種床はロータリーで土壤を細かくすればいいのだ、というような単純な考え方は間違いである。作物によって発芽のみならず、その後の作業や生育に影響を与えているのだから。同じロータリーを使っても、むしろ速度を早くして、PTOも低回転のほうが良い場合もあるということだけは頭に入れておいても損はないと思う。

以上のように、ロータリーをどのように扱うかという作業方法を伝えるだけでは、適切な播種床をつくるためのロータリー耕はできない。圃場をどのような状態にするためにロータリー耕をするのかを伝えなければ、適切な作業とは何かを考えることもしないだろう。

何を丁寧にしたらいいいのか 理解できれば改善できる

ハウスの灌水などでも同様のことがいえる。ハウス内にびっしりと葉物野菜を栽培している場合、中央付近であったり、灌水設備の近くであったり、外気温の影響を受けやすい場所であったり、生育の違いが見ら

れるのは当然のことだと理解している人が多い。しかし、これですら克服してハウス内の生育を揃えている方もいる。それは灌水設備の違いというよりも、灌水の重要性を理解して、細かく工夫して生育を揃えているのである。同じ灌水設備を揃えたとしても、生育が揃わないのは、細かな工夫が行なわれていないからで、同じ機材や設備を持っていてもその運用方法によって、結果は違ってくる。

かつて、株間の調査をしたときに株間のバラつきに驚き、データを取らせていただいた農家の方々に株間のバラつきが如何に品質や収量に影響を与えているのかを話したことがある。翌年のデータでは、株間の揃いが非常に良くなり、品質も大幅に向上していた。株間のバラツキを抑えることの重要性を知らなかったため、そのことを理解しただけで大幅に品質が改善されたわけである。

播種や植え付け作業は短時間で終わらせるだけではなく、株間がきちんと揃っているかが重要だということも理解できれば変わってくる。誰でも丁寧に植えているはずだが、株間を揃えることを具体的に伝えることで何を丁寧にやるべきなのかがはっきりとするのだ。

考 えるオペレーターを 育てるために

前回も書いたように、適切な作業が各工程で行なわれているのかどうかは、収量や品質に大きな違いをもたらす。よく言われる篤農家という人たちは、このような細かい部分を非常に大切にしている。なかなかその違いというのは見てもわからないので、技術的に派手に見える部分を真似してみたりしても同じ効果が現れず、「○○さんは特別だから」という言葉でごまかしてしまい、それ以上の違いを考えようとしめない。

実は、このような細かい部分の「丁寧さ」にこそ大きな意味がある。なかなか人に伝わらないのは、あまり人に伝えることの重要性が意識されない場合と、言葉にするのが難しい場合がある。後者は感覚的なことを人に伝えるのが難しい場合と、伝える側が上手く説明することができない場合とがあるようだ。

日本では、職人意識によるものか、あえて説明をしないという文化もある。親子での技術継承では農業でもこういった慣習は見られるが、「丁寧な作業」が伝わらなければ意味がない。耕作面積が大規模化し、多くのオペレーターが作業に携わるようになってくると教え方というのも非

常に重要になってくると思う。企業的な経営体では、現場の仕事は多くの人が役割分担するようになり、作業工程の均質化を図るためにも作業の意味を伝えることの重要性は増している。

さらに、どの作業をどの時期に、どのように行なうのか、その理由を説明することは、作業工程の意味を見直すのに非常に役立つ。人に伝える、教えるためには、自ら理解していない限りはできない。適切な作業を丁寧にするというのは、ゆっくりやればいいということではなく、何がその作業工程において重要なのかを考えながら行なうことである。作業工程への理解が深まれば、オペレーター自身もどのように行なうべきなのか、最適な方法、時期を考えることができるようになる。

ごく普通の作業を適切に丁寧にするとするのは、新規技術や新しい機械を導入することに比べれば、派手さはなく地味で、効果も疑問に持たれる方が多いと思う。このような地道な適切な作業の連続が歩留まりの向上や、収量、品質の向上につながり経営に直結するということを理解していただきたい。「丁寧な作業」において必要なのは時間でもお金でもなく、作業の意味をよく考えるということなのだ。